

シグナルコンディショナ

6 L 0 1

取扱説明書

NEC

NEC三栄株式会社

ご使用になる前に**▲はじめに▼**

お買い上げいただき誠にありがとうございます。ご使用の際には、取扱説明書をよく読んでいただき、正しくお取り扱いくださるようお願い申し上げます。

取扱説明書は、本製品を正しく動作させ、安全にご使用いただくために、必要な知識を提供するためのものです。いつも本製品と一緒に置いて使用してください。

また、取扱説明書の内容について不明な点がございましたら、弊社セールスマンまでお問い合わせください。

▲梱包内容の確認▼

冬季の寒い時期などに急に暖かい部屋で開梱しますと、本製品の表面に露を生じ、本製品動作に異常をきたす恐れがありますので、室温に馴染ませてから開梱するようお願い申し上げます。

本製品は十分な検査を経てお客様へお届けいたしておりますが、ご受領後開梱しましたら、外観に損傷がないかご確認ください。また、本製品の仕様、付属品等についてもご確認をお願いいたします。

万一、損傷・欠品等がございましたら、ご購入先または弊社支店・営業所にご連絡ください。

安全上の対策

▲本製品を安全にご使用いただくために▼

本製品は、安全に配慮して製造しておりますが、お客様の取り扱いや操作上のミスが大きな事故につながる可能性があります。

そのような危険を回避するために、必ず取扱説明書を熟読の上、内容を十分にご理解いただいた上で使用してください。

本製品のご使用にあたって、以下の事項を必ずお守りください。なお、取扱注意に反した行為による障害については保証できません。

本取扱説明書では、本製品を安全に使用していただくために以下のような事項を記載しています。

警告

感電事故など、取扱者の生命や身体に危険がおよぶ恐れがある場合にその危険を避けるための注意事項が記されています。

注意

機器を損傷する恐れがある場合や、取扱上の一般的な注意事項が記されています。

警 告

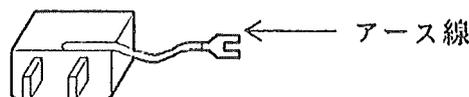
■ 電源について ■

供給電源が本製品の定格銘板に記載されている定格内であることを確認してください。また、感電や火災等を防止するため、電源ケーブルや接続ケーブル、及び2極-3極交換アダプタは、必ず弊社から支給されたものを正しくお使いください。

■ 保護接地及び保護機能について ■

本製品の電源を入れる前に必ず保護接地を行ってください。保護接地は本製品を安全にご使用いただき、お客様及び周辺機器を守る為に必要です。なお、次の注意を必ずお守りください。

- 1) 保護接地
本製品は感電防止などのために、接地線のある3極電源ケーブルを使用しています。必ず保護接地端子を備えた3極電源コンセントに接続してください。
- 2) 保護接地の注意
本製品に電源が供給されている場合に、保護接地線の切断や保護接地端子の結線を外したりしないように、注意してください。もしこのような状態になりますと本製品の安全は保証できません。
- 3) 2極-3極交換アダプタ
電源プラグにアダプタを付けて使用するときは、2極-3極交換アダプタから出ているアース線、またはアース端子(追加保護接地端子)を必ず外部のアース端子に接続して大地に保護接地をしてください。



■ ガス中での使用 ■

可燃性、爆発性のガス、また蒸気のある雰囲気内で使用しないでください。お客様及び本製品に危険をもたらす原因となります。

■ ケースの取り外し ■

本製品のケース取り外しは、たいへん危険ですので、弊社のサービスマン以外が行うことを禁止いたします。

■ 入力信号の接続 ■

本製品の保護接地端子を確実に接地してから被測定装置への接続を行ってください。本製品と接続される測定器等の接地電位差が、同相許容入力電圧範囲を越えないようにご注意ください。

■ 耐電圧性能 ■

本製品は50または60Hzの同相入力電圧に対しては高い耐電圧性能を有しておりますが、同相電圧がそれよりも高い周波数成分を含む場合の耐電圧性能は周波数が高くなるほど、低くなります。例えば、スパイク状の同相信号に対してはサージ吸収素子等を本製品前段に用いて本製品および作業者を保護する必要があります。

■ 出力信号の接続 ■

本製品の出力コモンは保護接地と同じ測定系の接地点に接続してください。

■ ヒューズの交換 ■

- ヒューズを交換する場合、下記の項目に十分注意を払って行ってください。
- 1) ヒューズ切れの場合、本体内部が故障していることが考えられますので、ヒューズを交換する前に原因をよくお確かめください。
 - 2) ヒューズ交換するときは、必ず電源スイッチをOFFにし、電源ケーブルをコネクタより外し、入力ケーブルも外してください。
 - 3) ヒューズは必ず指定の定格のものを使用してください。

注 意

■取り扱い上の注意■

以下の事項に十分注意して、本製品をお取り扱いください。

- 1) 本製品の操作方法を理解している人以外の使用を避けてください。
- 2) 本製品の保存温度は、 $-20\sim 70^{\circ}\text{C}$ です。
特に、夏の時期には長時間日射の当たる場所や温度が異常に高くなる場所（自動車内等）での保管は避けてください。
- 3) 本製品を以下のような場所に設置しないでください。
 - ① 本体内部の温度上昇を防ぐため、通風孔があいています。
本製品のまわりを阻んだり、左右や上部に物を置くなど通風孔をふさぐようなことは絶対に行わないでください。
(本体内部温度の異常上昇につながり故障の原因となります。)
 - ② 紙などの燃えやすいものを本製品の近くに置かないでください。
- 4) 本製品を以下のような場所でご使用にならないでください。
 - ① 直射日光や暖房器具などで高温または多湿になる場所
(使用温度範囲： $0\sim 40^{\circ}\text{C}$ 、湿度範囲： $20\sim 85\%$)
 - ② 水のかかる場所
 - ③ 塩分・油・腐食性ガスがある場所
 - ④ 湿気やほこりの多い場所
 - ⑤ 振動のはげしい場所
- 5) 電源電圧の変動に注意し、本製品の定格を越えると思われるときは、ご使用にならないでください。
- 6) 雑音の多い電源や、高圧電源の誘導等による雑音がある場合は、誤動作の原因となりますので、ノイズフィルタ等を使用してください。
- 7) 本製品の最大許容入力電圧を越えた信号を入力しますと故障の原因となりますので行わないでください。
- 8) 本製品の通風孔などの穴にとがった棒などを差し込まないでください。
故障の原因となります。
- 9) 本製品の精度を維持するために、定期的な校正をお勧めします。1年に一度定期校正（有償）を行うことにより、信頼性の高い測定が行えます。
- 10) ご使用中に異常が起きた場合は、直ちに電源を切ってください。
原因がどうしてもわからないときは、ご購入先または弊社支店・営業にご連絡ください（その際、異常現象・状況等を明記してFAXにてお問い合わせください）。

NEC三栄株式会社

6LOX注意事項 5691-1739

平成7年6月 第1版発行

取扱上の注意事項

1. 本器の入力電圧範囲にご注意下さい。
同相許容電圧はAC250V、差動許容電圧はAC250Vです。
2. 本器の出力に外部から電圧・電流を加えないでください。
3. 本器の電源電圧はAC90～110Vの範囲で使用してください。
また電源ヒューズはタイムラグヒューズ（Tマーク）を使用してください。
4. 使用温度範囲（0～40℃）、使用湿度範囲（20～85%RH、ただし結露除く）以内でご使用ください。
高湿度下、低温保管されていたものを取り出して使用するときは結露しやすいのでご注意ください。
5. 本器の保管場所は、下記のような場所を避けてください。
 - 湿度の多い場所
 - 直射日光の当る場所
 - 高温熱源のそば
 - 振動の激しい場所
 - ちり、ごみ、塩分、水、油、腐蝕性ガスの充満している場所
6. 多チャンネル使用時には通風に充分注意し、ファンユニット等との併用を行って下さい。

目 次

取扱上の注意事項

目 次

まえがき

1. 各部の名称と機能	1
1-1 前面パネル	1
1-2 背面パネル	2
2. 測定準備	3
3. 測 定	3
3-1 入力ケーブルの接続	3
3-2 出力ケーブルの接続	3
3-3 操作方法	5
4. 良い測定データを得るには	6
4-1 入力ケーブルの接続	6
4-2 C M R	6
4-3 フィルタ	6
4-4 自動平衡形記録器との接続	6
4-5 電磁オシログラフとの接続	6
5. 周辺機器	7
5-1 直流電圧電流発生器 3K02との接続	7
5-2 ケースへの収納	7
5-3 ケースの換気	8
6. 動作原理	9
7. 保 守	10
8. 仕 様	11
9. 資 料 編	12
9-1 帯域、フィルタ、位相特性	12
9-2 ケーブル類一覧表	13
9-3 ユニット、ケース外形寸法図	14
9-4 直流増幅器の使い方 (三栄レポート101より抜萃)	20

ま え が き

このたびは当社新シグナルコンディショナファミリーをお買上げいただき誠に有難うございました。
当ファミリーは、性能はもとより特にIEC規格に準拠、安全性、信頼性を考慮し開発したシグナルコンディショナです。必ずや皆様の一般計測や計測システム等にお役に立つことと思います。
万一不備な点がございましたら最寄の店所まで御連絡下さい。

当ファミリーには、下記の製品が販売されております。次の機会に是非ご検討下さい。

	形 式	C H 数	利 得	周波数特性	備 考
直 流 増 幅 器	6 L 0 1	2ch/ユニット	×0.1 ~×100 可変利得×1 ~×2.5	DC~5kHz	入・出力アイソレーション
	6 L 0 2	2ch/ユニット	×0.1 ~×1000 可変利得×1 ~×3.3	DC~100kHz	直結差動入力
	6 L 0 6	1ch/ユニット	×0.1 ~×2000 可変利得×1 ~×2.5	DC~10kHz	入・出力アイソレーション
	6 L 0 7	2ch/ユニット	×1 ~×1000 可変利得×1 ~×2.5	DC~100kHz	入・出力アイソレーション
動ひずみ測定器	6 M 6 7	1ch/ユニット	ACブリッジ式 自動バランス	DC~2kHz	入・出力アイソレーション
	6 M 7 7	1ch/ユニット	DCブリッジ式 自動バランス	DC~10kHz	入・出力アイソレーション
直 流 電 圧 電 流 発 生 器	3 K 0 2	1ch/ユニット	0 ~11V, 0 ~110mA	—	—
ローパスフィルタ	9 B 0 2	2ch/ユニット	fc=1Hz~9kHz	DC~100kHz	—

当ファミリーでは、下記のユニット台、ユニットケースが用意されています。

	形 式	項 目	備 考
ユ ニ ッ ト 台	4 3 7 2 1	1 C H 用	
	7 9 0 5	3 C H 用	
ベンチトップケース	7 9 0 6	6 C H 用	
	7 9 0 7	8 C H 用	
ラックマウントケース	7 9 0 8	8 C H 用	

1. 各部の名称と機能

1-1 前面パネル

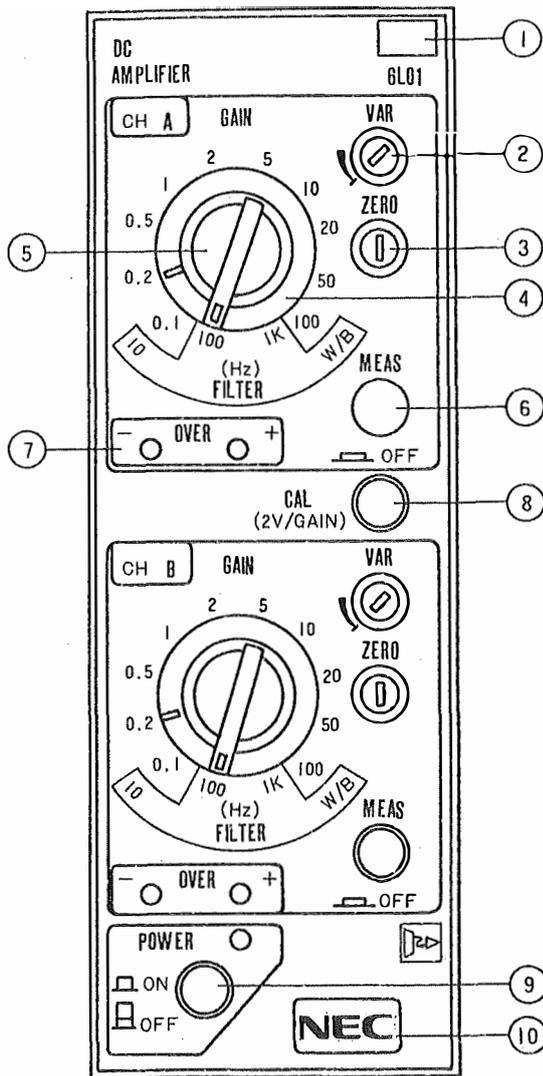


図 1

- ① CH番号を貼ります。
- ②利得微調整 (VAR)
左へ一杯に回したときの利得は④のGAIN設定値となります。右へ回すに従って利得は増加します。右一杯の位置で④のGAIN設定値の約2.5倍になります。
- ③零調整 (ZERO)
左へ一杯に回すと約-1V,右へ一杯に回すと約+1V出力電圧が移動します。
- ④利得切換スイッチ (GAIN)
左一杯×0.1倍(入力100Vの信号が出力10Vになる)から×100倍(入力0.1Vの信号が出力10Vになる)まで、ステップ切換えができます。

- ⑤フィルタ切換スイッチ (FILTER)
フィルタの遮断周波数の切換で、2ポールのベッセル形フィルタです。W/B(ワイドバンド)時は、帯域が5kHz(-3dB)でバターワース特性になります。
- ⑥入力切換スイッチ (MEAS-OFF)
このスイッチを押込むと、入力が切離されてOFFになります。再び押込むとボタンが出て入力がONになります。
GAIN④, VAR②に無関係に出力電圧のチェックができます。
- ⑦出力過大表示灯 (OVER)
出力電圧が±約10.5Vを越えると、越えた側で赤色LEDが点灯し、異常を知らせます。
出力電圧がOVERになる時間が短いとき、または非くり返し波形のときは目視できません。
- ⑧校正電圧ボタン (CAL)
このボタンを押すと、2チャンネル同時に校正電圧が印加されます。VAR②を左一杯に回しておいて、CALボタンを押すと出力で+2Vの校正電圧が出ます。VARを右へ回すに従って校正電圧も増加し、+5V以上になります。
入力切換スイッチ⑥は、入力信号と本器との間のON・OFFスイッチなので、このスイッチがどの位置であっても、CALは印加できます。
- ⑨電源スイッチ (POWER)
スイッチを押すと、本器に電源が供給されます。再びスイッチを押すとボタンが出て電源がOFFになります。このときスイッチのノブは黒いリングがでます。
- ⑩パネルロック
本器をケースに収納するときを使用します。手前に強く引くとロックが外れ、ケースから取出すことができます。

1-2 背面パネル

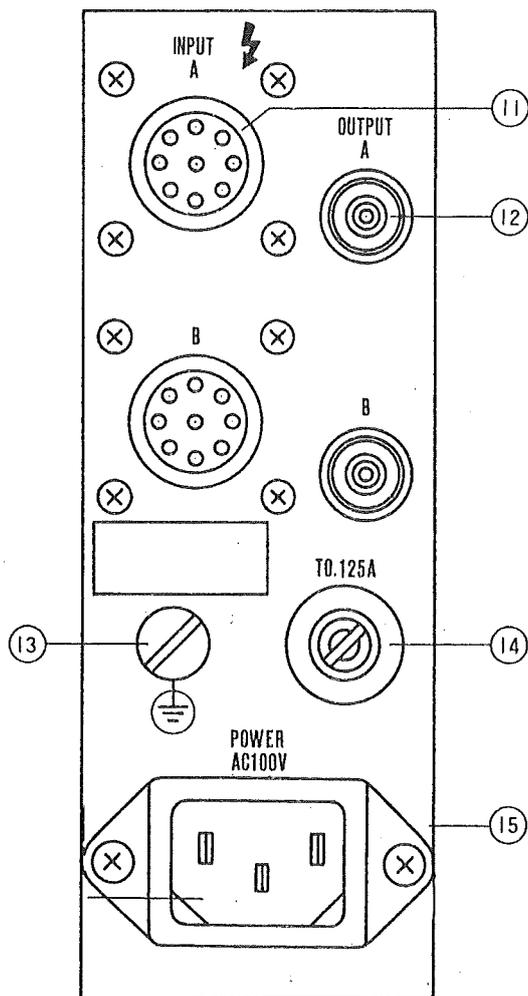


図 2

①入力コネクタ (INPUT)

直流増幅器用入力ケーブルを接続します。

②出力コネクタ (OUTPUT)

出力電圧、電流は $\pm 10V$ 、 $\pm 50mA$ です。
電圧入力の記録器 (データレコーダ、直流増幅器付オシログラフ)、A/D変換器など、または電磁オシログラフも接続できます。

③保護用接地端子 (GND)

本器は、IEC規格クラスI機器となっているので、ご使用に際して接地をとってください。

④ヒューズ・ホルダー (FUSE)

電源ヒューズです。本器で使用するヒューズは $5\phi \times 20mm$ のミゼット型タイムラグヒューズです。

⑤電源コネクタ (POWER)

付属の電源ケーブルを接続します。

3ピンコネクタの中央のアースピンと保護用接地端子③とは接続されています。

2. 測定準備

ケーブル類を接続する前に次のことを確認してください。

- (1) 入力切換スイッチ⑥を押込んでOFFにする。
- (2) 電源スイッチ⑨をOFFにする。
- (3) 保護用接地端子⑬をアースにおとす。

3. 測定

3-1 入力ケーブルの接続

付属の入力ケーブルを背面入力コネクタに差込みます。

入力ケーブルのシールドは、本器のガードシールドになっているので入力接続図に従ってシールドを接続してください。

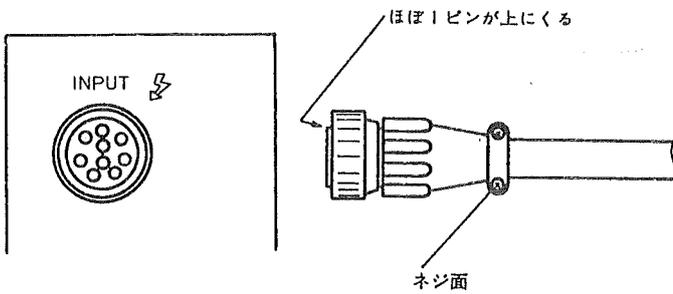


図 3

- ⑤ピンH
- ①ピンL
- ②-③-④-⑥-⑦-⑧-⑨シールド
(ガード)

入力接続図

●信号源が不平衡のとき

(シャント抵抗
データレコーダのバッファ)

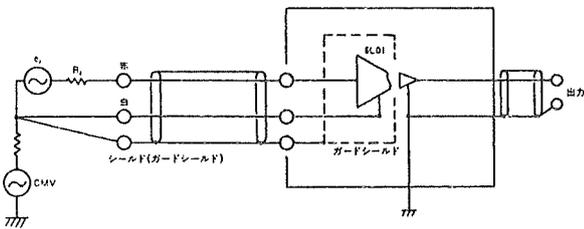


図 4

出力を逆位相にしたい場合は、赤・白芯線を逆に接続してください。

●信号源が平衡のとき

- (1) シールドが信号源にとれるとき
(ブリッジ)

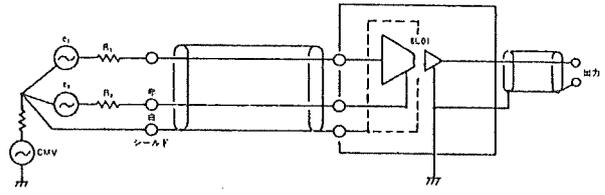


図 5

- (2) 信号源が2線式(熱電対)のとき

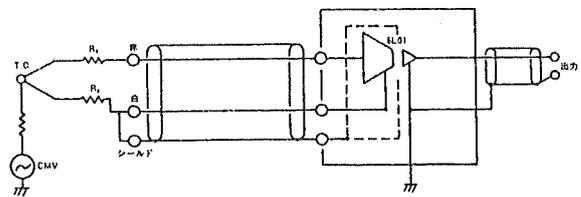


図 6

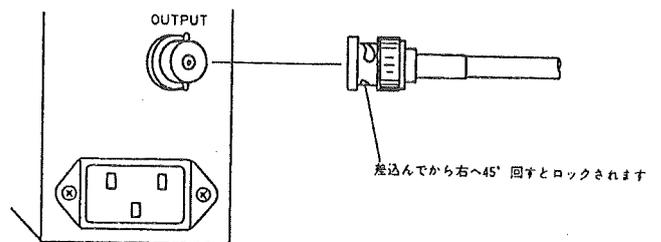
熱電対の線長が長くなると $R_1 \cdot R_2$ が大きくなり、CMRが悪くなります。

その場合、裸線の部分が極力短くなるように、シールド付きの補償導線等をご使用ください。

3-2 出力ケーブルの接続

出力端子(BNC)に出力ケーブルを接続します。負荷としてはデータレコーダ、電磁オシログラフ、オシロスコープ、A/D変換器等を接続します。

特に本器は、1ユニットに2チャンネル内蔵されていますが、チャンネル間の電源は別々なので、最終負荷側での一点接地が可能です。



差込んでから右へ45°回すとロックされます

出力負荷の接続

1. 自動平衡形記録器

本器の出力フルスケール電圧は±10V
 ですので、自動平衡形記録器側で、みだりに感度を上げると(たとえば±0.1V/F.S) S/Nのよい測定ができません。

2. データレコーダとの接続

- (a) 入力レベルが20Vp-p(±10V)以上印加できるデータレコーダには、直接接続できます。
- (b) 入力に分圧回路を必要とする場合
 データレコーダの入力レベルが±1Vのものは、図8のような分圧回路が必要となります。

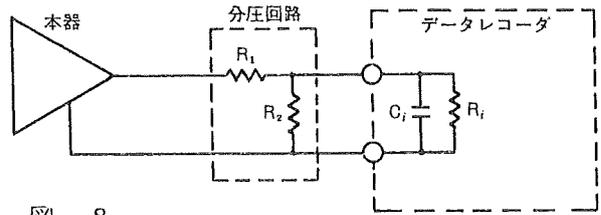


図 8

ただし $R_1 + R_2 \parallel R_3 \geq 200 \Omega$ として下さい。

3. 電磁オシログラフとの接続

電磁オシログラフの入力部分には次の種類があります。本器の最大出力電流は±50mAなので直流増幅器内蔵以外のはガルバノメータの安全電流内で使用してください。

電磁オシロ入力部	回路	入力の種類	当社の電磁オシロの形式名	注意する点
直流増幅器付		電圧	5L45, 46, 47, 48	入力レンジ
振幅調整器付		電流	5I.41, 42, 43, 44	ガルバノメータの安全電流
振幅調整器なし		電流		

振幅調整器がない電磁オシログラフでは、次表のようなシリーズ抵抗を接続してください。

ガルバノメータ 形式番号	色別	感度一様な 周波数範囲	外部適正 制動抵抗	シリーズ 抵抗	振幅(光学長 30cm)	
					□□/0.5V	□□/10V
3311-B1(P-110)	銀	DC~70Hz	80Ω	100kΩ	約3.4	約68
3312-B1(P-270)	青	DC~170Hz	14Ω	10kΩ	2.7	5.4
3313-B1(P-370)	黄	DC~260Hz	12Ω	2kΩ	2.6	5.3
3308-B3(P-1000)	赤	DC~650Hz	200Ω以上	1kΩ	3.8	7.7
3303-B3(P-1500)	橙	DC~750Hz	200Ω以上	1kΩ	2.2	4.5
3309-B3(P-2000)	黒	DC~1kHz	200Ω以上	680Ω	1.5	3.0
3310-B3(P-4000)	緑	DC~2kHz	100Ω以上	470Ω 1/2W	1.0	2.0
3314-B3(P-8000)	茶	DC~4.8kHz	100Ω以上	180Ω 1W	0.6	1.3
3315-B3(P-13000)	紫	DC~7kHz	100Ω以上	180Ω 1W	0.4	0.76

注) 光学長10cmのときは振幅が1/3になります。

3-3 操作方法

3-3-1 測定前の操作

ケーブル類を接続する前に、入力切換スイッチ (MEAS-OFF) を OFF にしてください。

3-3-2 電源の投入

1. 電源スイッチ (POWER) を押込むと本器に電源が供給されます。約 10 分間予熱を行なってください。架台収納時は 1 時間程予熱時間を必要とします。

2. 零調整 (ZERO)

入力切換スイッチ (MEAS-OFF) を OFF にして、前面パネルの零調整器を回すと本器自身のオフセット (零点調整) を調整できます。

時計方向 (CW) に回して出力はプラス方向に、反時計方向 (CCW) に回して出力がマイナスになります。

また入力切換スイッチを MEAS にして、上記の調整を行なうと入力信号と共に、オフセットの調整ができます。

3. 校正電圧 (CAL)

校正電圧は、2 チャンネル同時に出力でき +2V が出力されます。

利得微調整 (VAR) を、右へ回すに従って校正電圧も大きくなり右一杯で約 5V となります。

入力信号の換算は (例えば B の波高値の入力電圧は次の通りです。

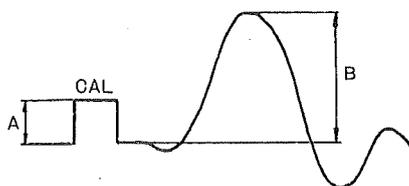


図 9

$$\text{未知入力電圧} = \frac{B}{A} \cdot \frac{1}{(\text{利得})}$$

× 2V (校正電圧)

(注) 上記利得は、利得切換スイッチ④のツマミ位置となります。

4. 出力オーバー表示 (OVER)

本器とデータレコーダとを接続するときには、データレコーダの入力レベルに注意してください。特に FM 変調での入力過大時には過変調によって記録できなくなります。そのために本器では、チャンネル別に出力がおよそ ±10.5V を越えると OVER 表示をします。

ただし、瞬間的な波形では表示を目視できません。

3-3-3 測定が終了したとき

(1) 入力切換スイッチ (MEAS-OFF) を OFF にする。

(2) 電源スイッチを OFF にする。

4. 良い測定データを得るには

4-1 入力ケーブルの接続

入力の接続図は、3-1項を参照してください。

入力ケーブルは2芯シールド付でこのシールドはフローティング部のガードになっています。

熱電対・シャント抵抗の測定で赤芯線を長くすると商用交流の影響を受けやすくなります。

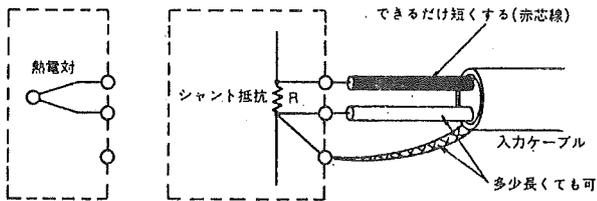


図 10

4-2 CMR

熱電対(2線式)での測定

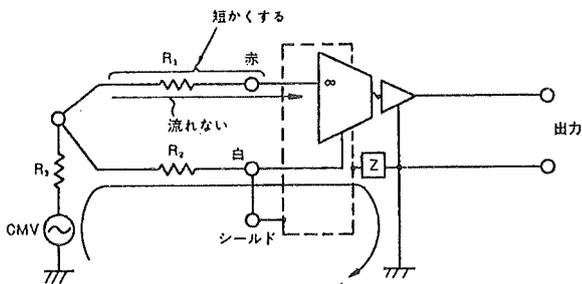


図 11

上図の場合、ノイズ電流 i は、
 $CMV \rightarrow R_3 \rightarrow R_2 \rightarrow Z$ (同相インピーダンス) を通って

$$i = \frac{CMV}{R_2 + R_3 + Z}$$

抵抗 R_2 (熱電対の線抵抗) にノイズ電流 i が流れるから
 ノイズ電圧 e は

$$e = R_2 i = \frac{R_2 \cdot CMV}{R_2 + R_3 + Z}$$

となります。

ノイズ電圧を小さくするには

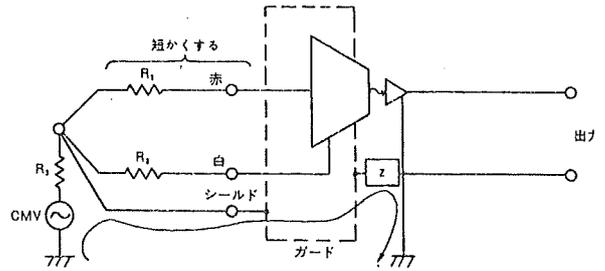


図 12

上図のようにシールドを熱電対先端に結ぶことができれば、ノイズ電流は R_1, R_2 を流れないので CMR が改善されます。

4-3 フィルタ

フィルタはベッセル形 2 ポールフィルタで S/N の改善に用います。

しかし、50・60Hz の商用交流の除去のために、本器のフィルタを 10Hz にしても約 $\frac{1}{8}$ 程度しか圧縮できません。

4-4 自動平衡形記録器との接続

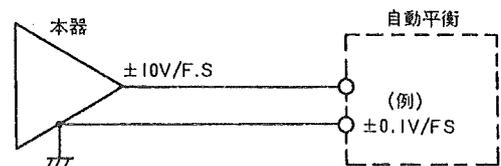


図 13

上図のように出力側に接続される記録器の感度を上げると、記録データがノイズ、安定度などによってふらつきます。自動平衡形記録器の感度を $\pm 10V / F.S$ に合わせて使用します。 $\pm 10V$ のレンジの無いものは 3-2 2項データレコーダと同様に接続します。

4-5 電磁オシログラフとの接続

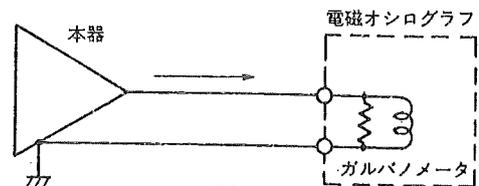


図 14

4-4項と同じように本器とガルバの間には制限抵抗を入れないと、見掛上感度が上がりますが、電源 ON・OFF での

電流ラッシュがガルバに流れ損傷の原因となります。またノイズ、安定度など記録線がふらつきます。3-2項を参照に本器とガルバの間に制限抵抗を入れてください。

5. 周辺機器

5-1 直流電圧電流発生器 3K02との接続

5-1-1 サプレッションとしての使用法

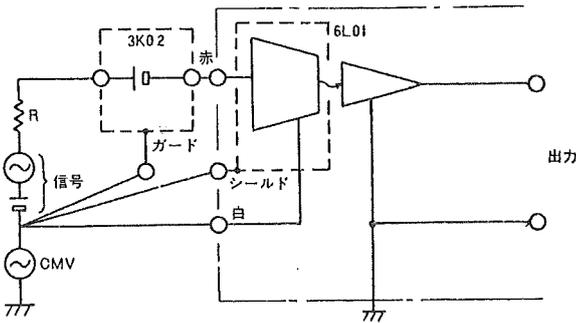


図 15

5-1-2 ブリッジ電源としての使用法

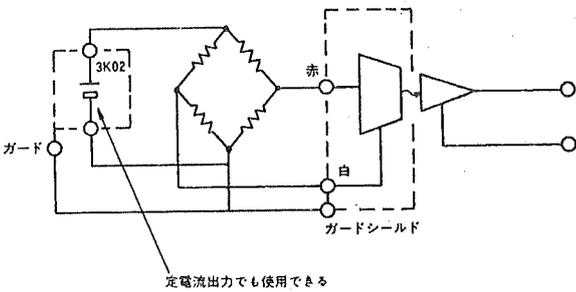


図 16

5-2 ケースへの収納

本器を収納できるケースは、ペンチトップケースで3, 6, 8チャンネル、ラックマウント用で8チャンネルケースがあります。

ケースとは、収納時にユニットへの電源のみ接続されるので、入・出力ケーブルの接続はケース背面より行ってください。

ユニットのパネルロックを強く前に引くとロックが外れ、ケースに収納でき

ます。収納後、パネルロックを押すとケース・ユニット間のロックが終了します。

本器は、納入した時点でケース底面に止めネジがついているので、これを取り去ってからロックを操作して下さい。また移動時にも、このネジを使用することにより本器の動揺が押えられます。ケースにアンプユニット全部が入っていないときには必ず止めネジをするようにして下さい。

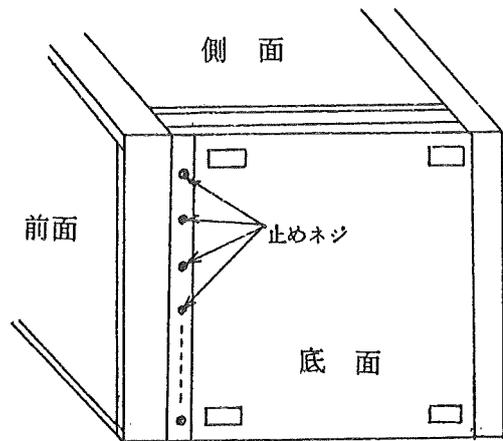


図 17

5-3 ケースの換気

5-3-1 ラックケース1台の設置

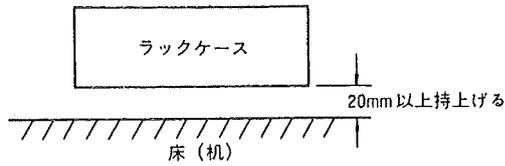


図18

5-3-2 ラックケースの多数実装について
 この場合、実装段数・負荷条件・環境温度によってユニット内部の温度が上昇し、信頼性が低下しますので、下表を参考にしておよそのファンの数量を決めて下さい。

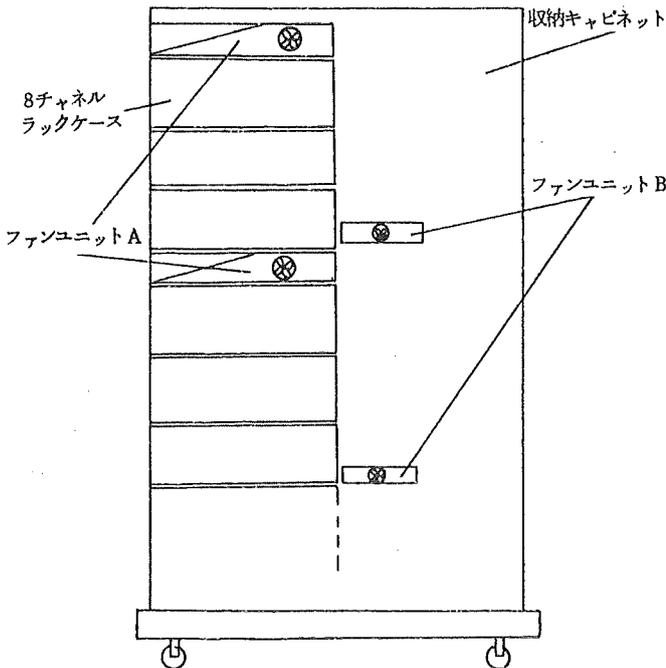


図19

ここで、ファンユニットAは多段、負荷電流大、環境温度が高い場合にユニットの内部の通気を行い、ファンユニットBは自然対流を促進します。

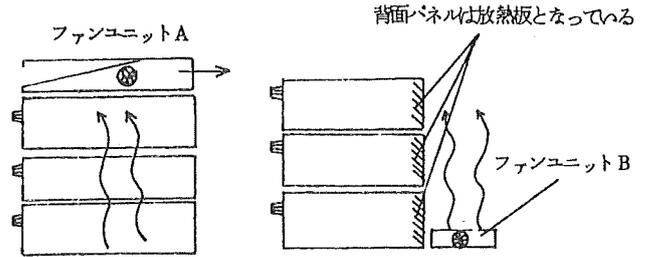


図20

ファンユニットBは、多数実装時にはおよそ3段に1ケの割合で、ラックケースに密着するようにお願いして下さい。(アンプのユニットケース背面パネルは放熱板となっています。)

環境 ラックケースの数	最悪環境下(注)	
	ファンユニットA	ファンユニットB
1 ~ 3	* 1	1
3 ~ 6	1 ~ 2	2
6 ~ 9	1 ~ 2	3

(注) この場合最悪環境下とは
 ○ 電源電圧 AC110V(+10%)
 ○ 出力電圧・電流 +10V/50mA
 ○ 使用温度 +40℃(周囲温度)としてあります。

上表を参考にして数量を決めて下さい。なおユーザ側で実装するときは実装方法を当社に問い合わせ下さい。

6. 動作原理

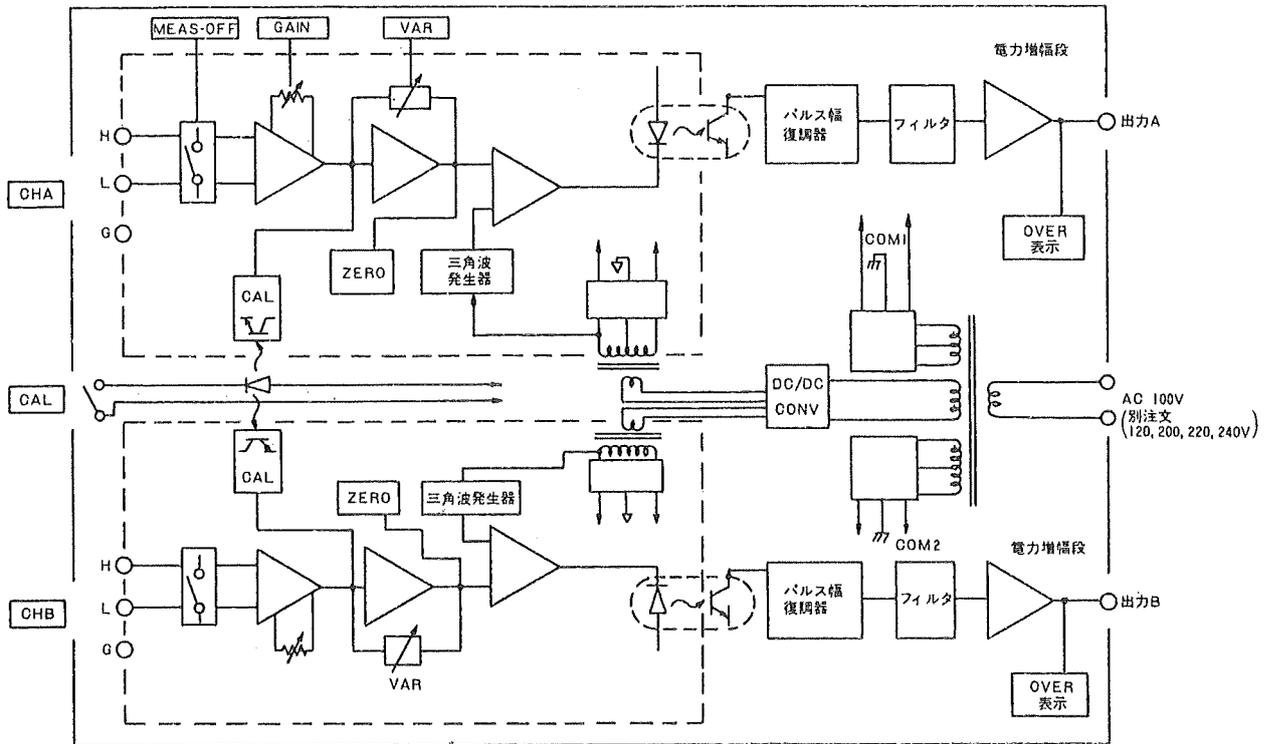


図 2 1

上図は本器のブロックダイアグラムで、2チャンネルは完全に分離した構成となっています。入力信号は入力切換スイッチを通して初段で $\times 0.1$ ～ $\times 100$ までの利得切換を行い、次段にて利得の微調整・校正電圧が加算されます。三角波発生回路は、スイッチング周波数と同期をとっており、2チャンネル間のビードが生じないように工

夫されています。

この三角波を規準信号として入力信号をPWM変調します。PWM変調された信号は、フォトカプラを通り復調回路を経てアナログ信号に戻します。その後フィルタ回路を通り、出力されます。

7. 保 守

本器は厳密なチェックを経て出荷していますが、十分な性能を示さぬ時は次の点を確認した上で、当社サービス部門へご連絡ください。

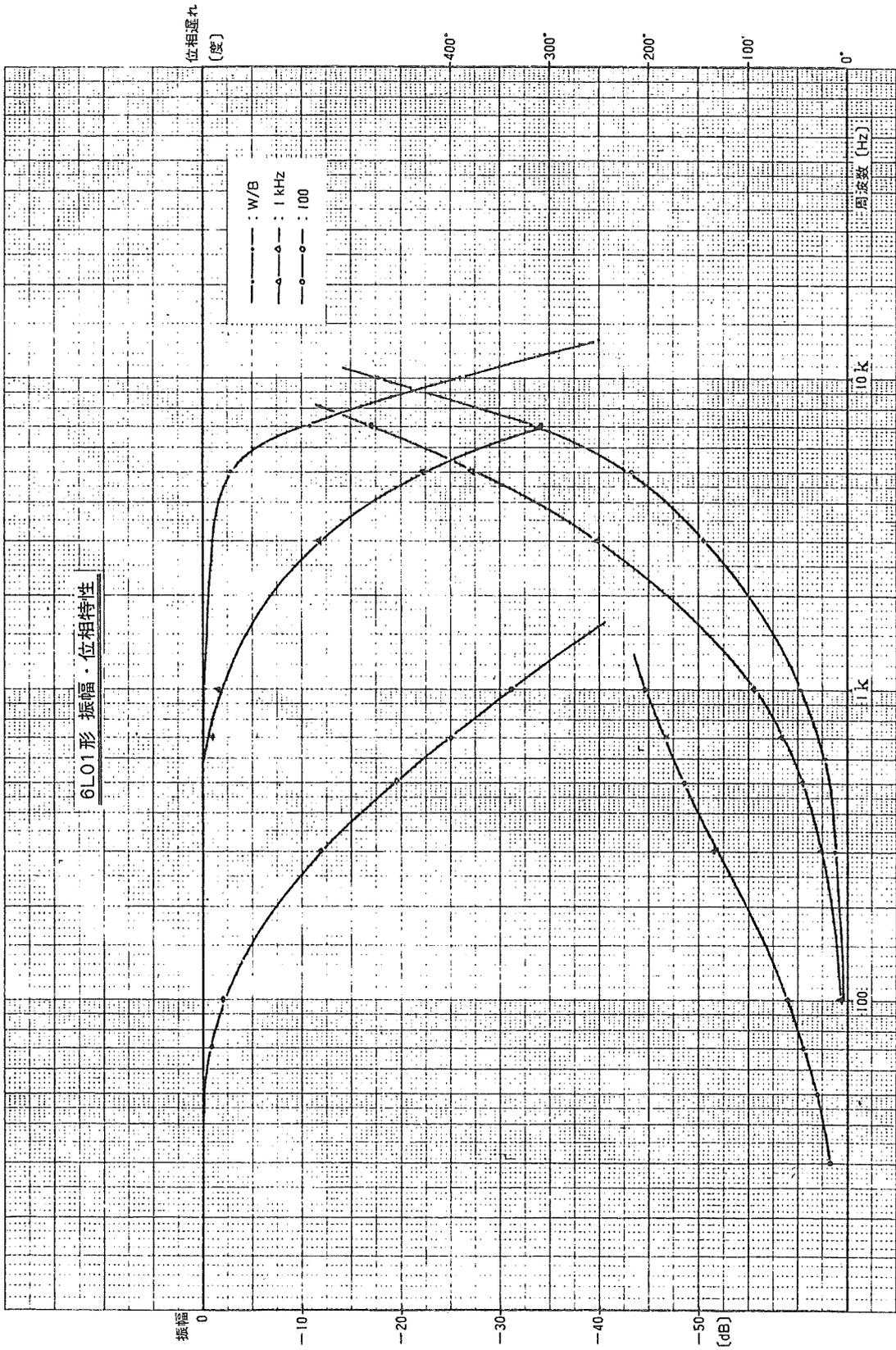
出力がふらつく	<p>1. 入力ケーブルの接続（3-1項参照）</p> <p>入力ケーブル { 赤 …+入力 白 …フローティング シールド…ガード コモン</p> <p>2. 入力ケーブルの断線</p> <p>{ 赤 …5ピン 白 …1ピン</p> <p>テストで導通チェックしてください。</p>
出力が出ない	<p>1. 出力ケーブルの接続</p> <p>負荷が定格よりおもくなっている またはショート。</p> <p>出力ケーブル { 赤 …+出力 黒 …コモン シールド…コモン</p> <p>2. 出力ケーブルの断線</p> <p>テストで導通チェックしてください。</p>
出力がとぶ	<p>1. 入力切換スイッチ（MEAS-OFF）をOFFにして、出力を見ます。</p> <p>a. とばないとき入力ケーブル、接続</p> <p>b. とぶとき本器のオフセットを回してみる。</p> <p>c. OVER表示のとき内部が故障している。</p>

8. 仕様

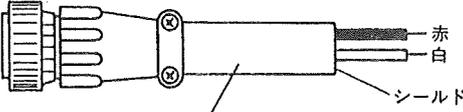
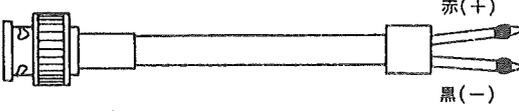
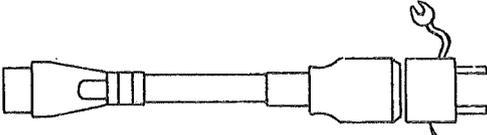
1. チャンネル数：
2チャンネル/1ユニット
電源内蔵（チャンネル間分離）
2. 入力回路、インピーダンス：
シングル入力、入出力フローティング
（パッシブガード）
入力インピーダンス 1MΩ
（通電時、過大時、電源OFF時共。ただし入力スイッチMEAS）
3. 利 得：
0.1, 0.2, 0.5, 1, 2, 5, 10, 20, 50, 100
精 度 ±0.5%/F.S *※ 別途*
安定度 ±0.05%/C
微調整 ×1~×2.5以上
4. 直 線 性：
±0.05%/F.S
5. 周波数特性：
DC~5kHz +1dB, -3dB
6. ローパスフィルタ：
DC~10Hz 2ポールベッセル型フィルタ
DC~100Hz
DC~1kHz
7. 同相許容入力電圧（CMV）：
AC250V
8. 差動許容入力電圧：
AC, DC250Vで焼損しない。
9. 同相分弁別除去比（CMRR）：
1kΩアンバランス（ホット側）で
100dB
いずれも最大利得時にて。
10. 零ドリフト：
50μV/C 最大利得時入力換算値
11. 雑 音：
W/B時 ×100……50mVp-p出力値
12. 校正電圧（CAL）：
+2V出力換算（ただしVAR左一杯）
±0.2% 2チャンネル同時印加
13. 出 力：
電 圧 ±10V
電 流 ±50mA
- 抵抗 1Ω
容量負荷 0.1μF
OVER表示 ±約10.5Vを越えると点灯
14. 零調整範囲：
±約1V
15. 絶縁抵抗：
DC500Vで100MΩ以上
入力, ガード, 出力, 筐体間
16. 耐 電 圧：
ガード - 出力間 } AC2000V
ガード - 筐体間（保護） } 1分間
接地端子)
電源 - ガード間 } AC2000V
" - 出力間 } 1分間
チャンネル1出力-チャンネル2出力間
AC500V 1分間
17. 使用温湿度範囲：
0~40℃ 20~85%RH
18. 保存温度範囲：
-20~+70℃
19. 電 源：
AC100V±10V 50, 60Hz
（AC120, 200, 220, 240V
別途指定）
20. 消費電力：
約13VA
21. 外形寸法：
幅50×高143×奥行350（mm）
突起部含まず
22. 質 量：
約1.7kg

9. 資料 編

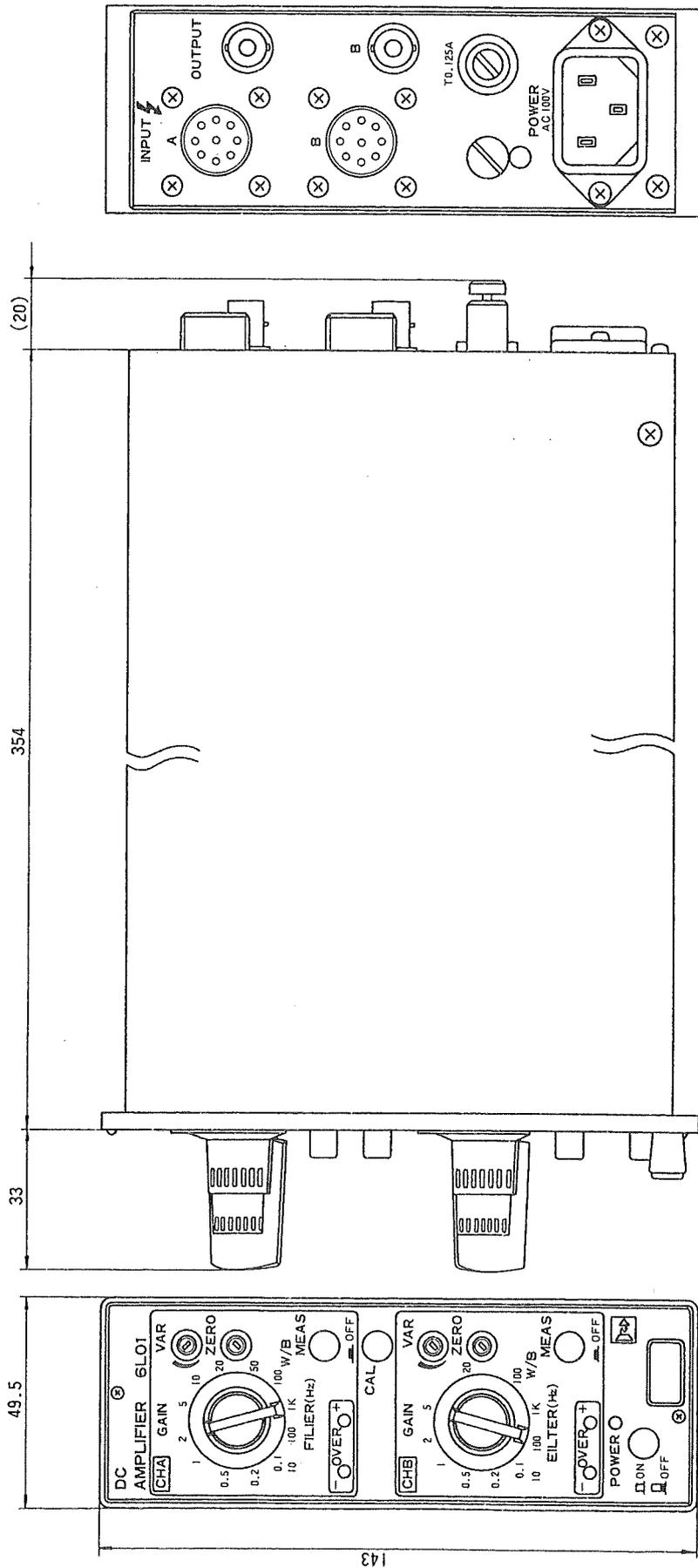
9-1 帯域、フィルタ、位相特性



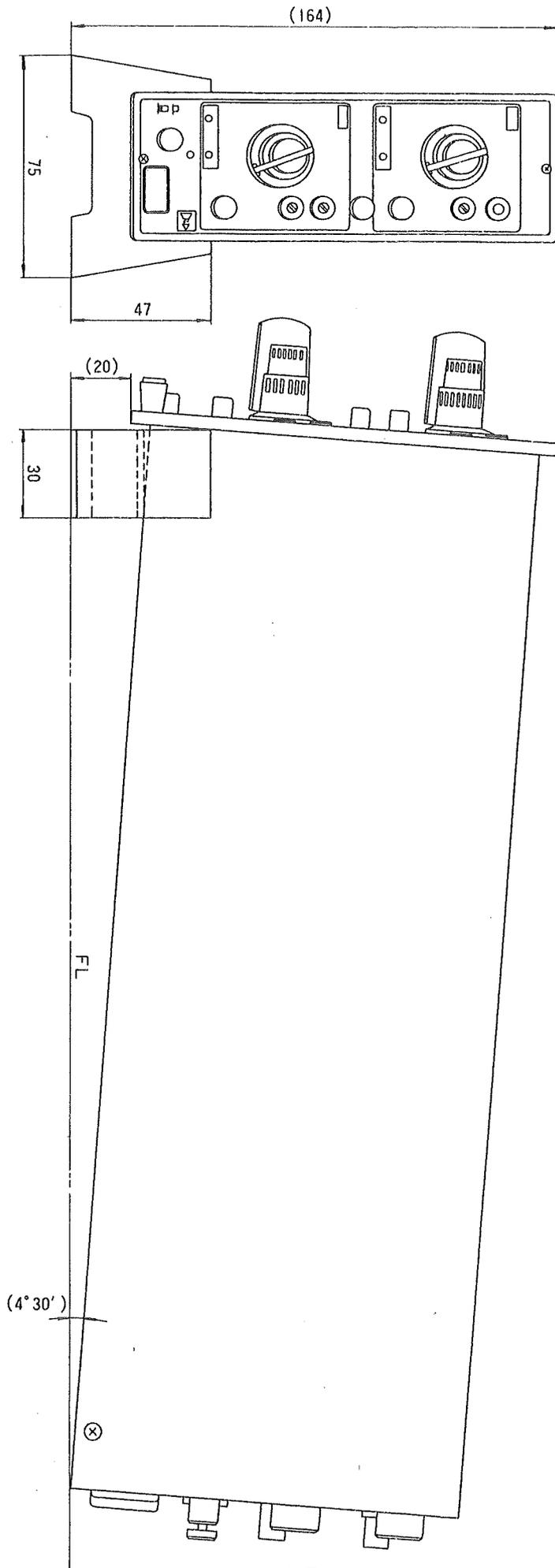
9-2 ケーブル類一覧表

ケーブルの名称	形 状	使用コネクタ	備 考
直流増幅器用 入力ケーブル 47344	 <p>⑤ +入力 ① -入力 ③ シールド</p> <p>0.3mm² 2芯S付(2m)</p>	AMP 206485-1 206062-1	使用ケーブルは耐圧電線のため、高いCMV下では必ずこのケーブルを使用して下さい。
出力ケーブル 47345	 <p>赤(+) 黒(-)</p>	DDK BNC-9-58U -CR10	
電源ケーブル 0311-2030	 <p>KPR-13</p>		

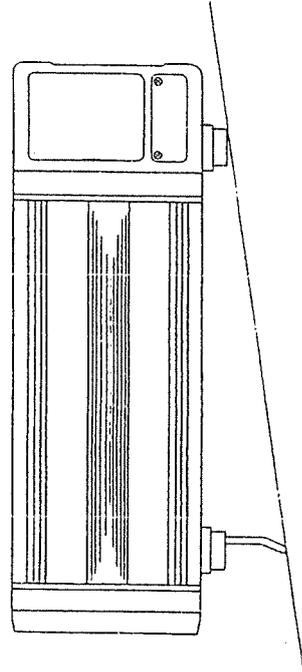
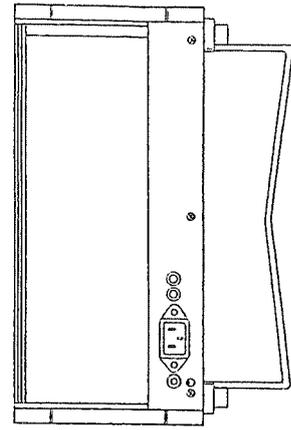
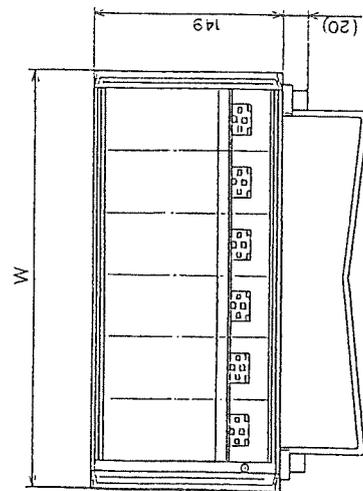
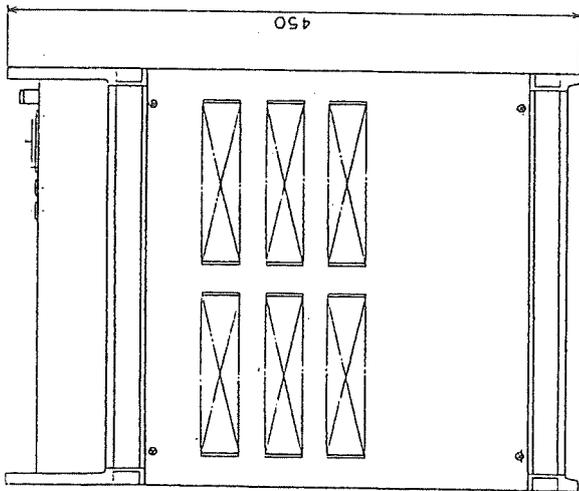
9-3 ユニット，ケース外形寸法図
 ユニット外形寸法図



ユニット台 (47321形) 外形寸法図

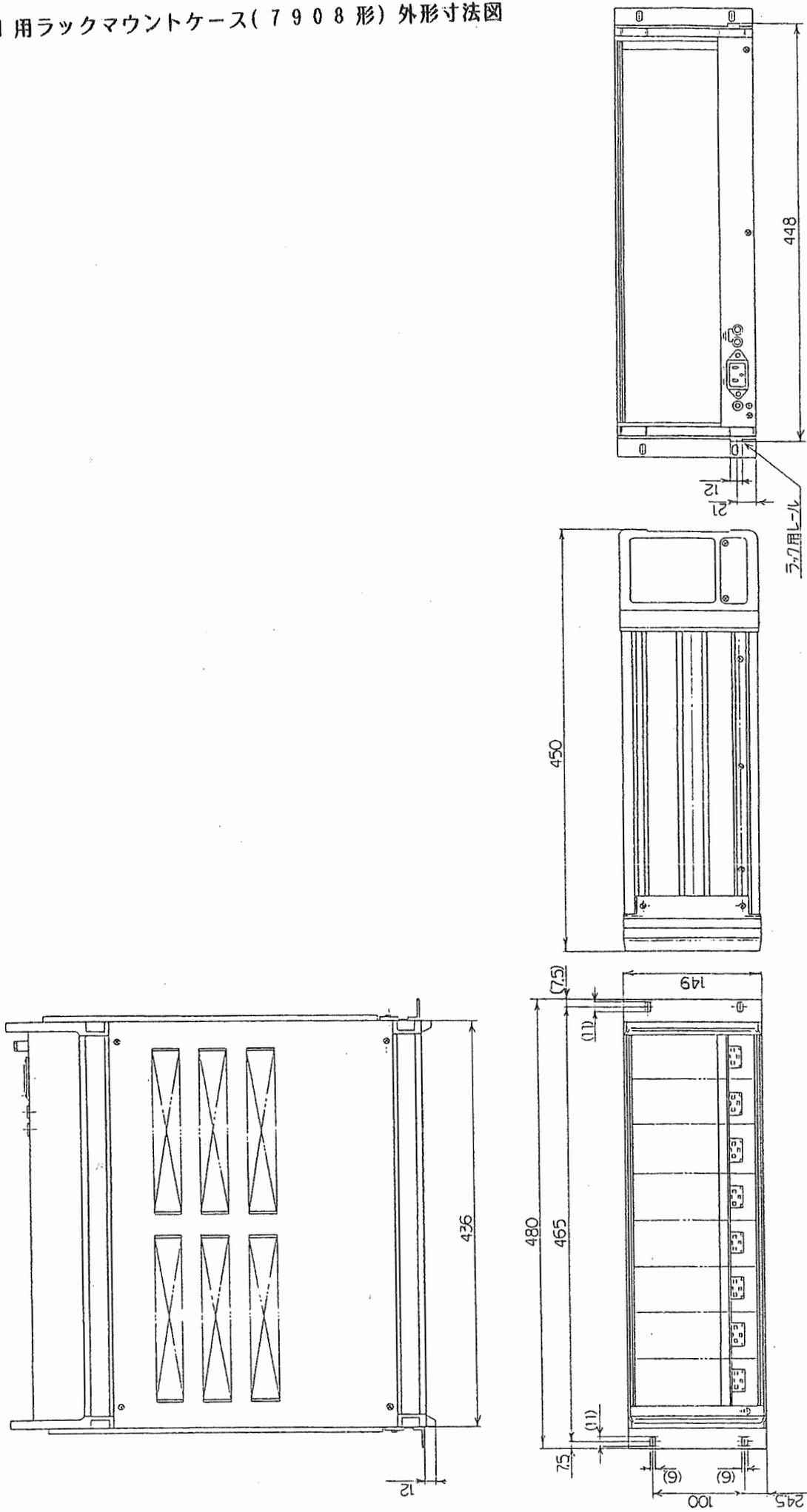


ベンチトップケース(7905~07)外形寸法図



型式	W
ベンチトップケース 7905	186
ベンチトップケース 7906	336
ベンチトップケース 7907	436

8CH用ラックマウントケース(7908形)外形寸法図



三栄レポート101より抜萃

9-4 直流増幅器の使い方

9-4-1 直流増幅器とは

直流増幅器は、オシロスコープやデジタルボルトメータなどに組込まれ、多方面で使用されている。

ここで、直流増幅器と呼ぶものは、計測用の直流増幅器のことで、性能が細かく仕様化され、ユーザーがこれを見て判断し、色々の用途に使用する機器をいう。

具体的には、デジタルボルトメータやオシロスコープなどに内蔵されている直流増幅器を取り出し、それ自体を使いやすい形にして、各種調整用ツマミを設け、各種の目的に応じられるよう汎用機器化したものである。

ところが、それ自体単体の計測器として使用することになると、測定目的にマッチする使い方、必要な性能などが解らず、直流増幅器の適切な使用によって簡単に解決可能な場合でも、計測に苦勞する場合が多い。これは直流増幅器の入力側、出力側に接続される機器の電氣的仕様に限界のあること、および直流増幅器自体その用途を制限せず、まったくの汎用計測器であるためと思われる。このため直流増幅器は実に多様な用途が考えられる。そこでまず基本的用途について解説する。

一般的に、何か計測しようとする場合、信号源と最終的にデータをとる機器（レコーダ、データ集録・処理装置など）の間で、信号をコンディショニングする必要がある。

その第一は信号レベルが小さい場合、組合せ機器に応じたレベルまで増幅する機能である。（図1、2を参照してください）

左の状態では、信号源のフルスケール出力を、負荷はフルスケール0.1%で読みとることになり、分解能、S/Nの悪い測定しかできない。

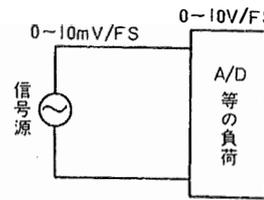


図 1

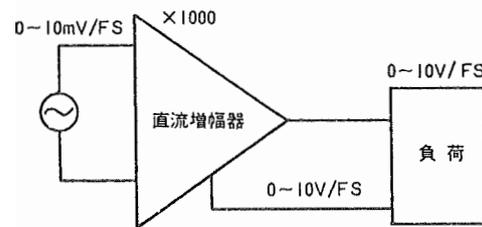


図 2

直流増幅器を利得 $\times 1000$ で使用すると信号の $0\sim 10\text{mV}$ を $0\sim 10\text{V}$ に増幅でき負荷へフルスケール電圧で信号を供給できるので、分解能S/Nとも良い測定ができる。

この場合、現在の増幅器は性能面で増幅度（利得）の正確さは、デジタルボルトメータ並に直流領域で高く、また、周波数特性は、 100KHz 程度までのびており、一般的物理量の計測に必要な帯域を十分にカバーしている。

第二は援衝器としての機能である（図3、4を参照してください）何らかの計測をする場合、その信号源とデータを記録あるいは処理する機器とは、直接接続できない場合が多い。

これは一般的増幅機能の他に、バッファとしての機能を必要とする機会が多いからである。

すなわち信号源に対し、高い入力インピーダンスで受けて負荷を軽くし、負荷となる機器には低いインピーダンスの出力を与えてやることにより

誤差の発生を防ぎ、耐雑音性を高める機能である。

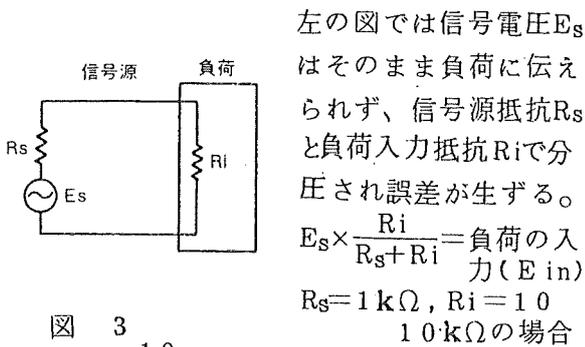


図 3
 $E_{in} = E_s \times \frac{10}{1+10} = 0.91 E_s$
 となり 9% の誤差となる。

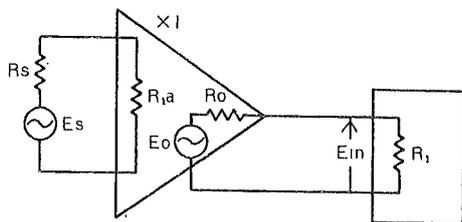


図 4
 直流増幅器を使用すると、通常入力抵抗 R_{ia} は非常に高く出力 R_o は非常に小さい。

例として $R_s = 1\text{ k}\Omega$, $R_{ia} = 10\text{ M}\Omega$, $R_o = 1\Omega$
 $R_i = 10\text{ k}\Omega$ で考えると

$$E_o = E_s \times \frac{R_{ia}}{R_{ia} + R_s} = 0.9999 E_s$$

$$E_{in} = E_o \times \frac{R_i}{R_i + R_o} = E_o \times \frac{10^4}{10^4 + 1}$$

$= 0.999999 E_o = 0.9998 E_s$ で 0.02% の誤差しか生じない。

注：信号源が定電圧出力、直流増幅器も低出力抵抗（定電圧出力）のもので説明したが、工業用計器には検出端だけではなく、回路も含んでいて、温度変換器とか圧力発振器と呼ばれているものがあり、これらには定電流出力のものが多い。この場合 $R_s \gg R_i$ で信号電流 $I_s \times R_i \leq V$ という条件で使用する必要がある。

（ V は信号源の電圧の動作範囲）このために R_i には上限が生ずる。この場合はその制限内のシャント抵抗でターミネートし、その両端の電圧をとりだすことによって、簡単に電圧として測定可能になる。

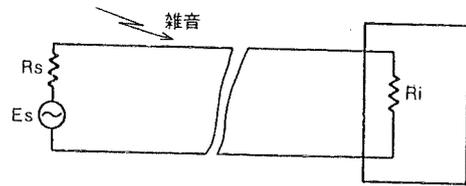


図 5
 上の例では線間の抵抗 $R_s \parallel R_i$ で R_s が大きい場合、外来雑音をひろいやすくなる。

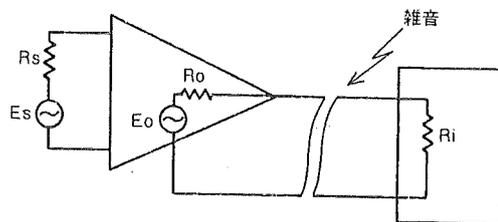


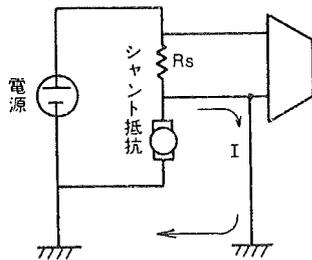
図 6
 この例では長く線をひくところが直流増幅器の出力からで線間の抵抗 $R_o \parallel R_i$ となり $R_s \gg R_o$ の場合、その分だけ改善される。

第三は、信号源と負荷との間のアイソレーションに使用する場合である。（図 7, 8 を参照して下さい）

信号源（変換器、シャント抵抗、その他機器など）のコモンと、負荷となる機器（レコーダ、データ集録・処理装置など）とのコモンの間には電位差のある場合が多い。

この場合電位差が小さいときは、直結差動形を使用し、大きい場合はフローティング入力のもので信号の受け渡しを簡単に行なうことができる。直流増幅器を使用しないと、測定に大きな誤差を生じたり、雑音（商用電源によるもの）が大きく混入し計測が不可能になる。その他、負荷となる機器が破損したり、信号源が不

用意に接地されるために、信号源側を破損することもある。



電源側にシャント抵抗が入っている測定では、片線接地の計器は接続できない。接続すると電流

図 7
I が流れ、Rs や電源等を焼損する可能性があり、またデータもとれない。

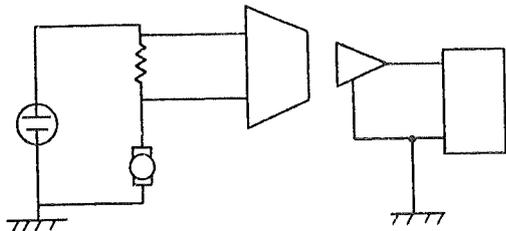


図 8
フローティング入力の直流増幅器を使用すれば、入出力間がきりはなされるので問題を生じない。(耐圧→CMVには注意)また次図の方法もある。

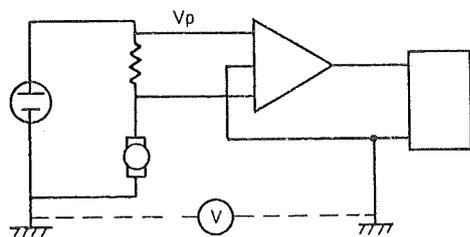


図 9
接地間電位差 V と、電源電圧 V_p の和が小さいとき(直流増幅器の CMV より小さいとき)は図のように直結差動形でもよい。

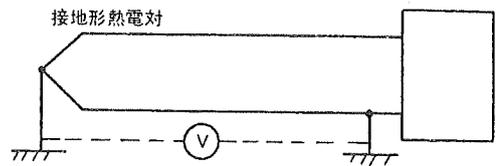


図 10
接地形熱電対に片線接地の計器を接続すると接地点間電位差 V が信号と加算され、測定不能になる場合が多い。

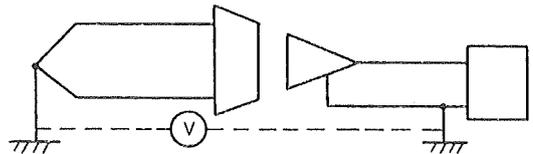


図 11
フローティング入力直結差動形の使用で V による問題を避けられる。V が小さいときは上の例にあるように直結差動形でもよい。

第四は直流増幅器の持っている「利得の調整機能」を利用し、係数器として用いたり、付加機能として持っているローパスフィルタに使用することである。(図 12 を参照してください)

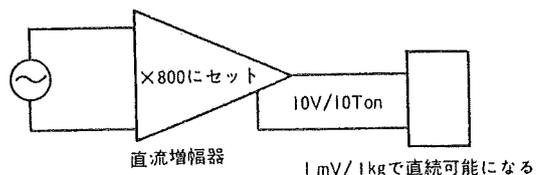


図 12
以上、簡単に、直流増幅器の基本的な機能を述べてみた。しかし実際のアナログ計測は、なかなかめんどろな要素が多く、計測に苦労する場合が多いと思う。
この点メーカーは、豊富な経験をつんでいるのでお問い合わせいただければ、何らかの解決法を見出せるものと思う。

9-4-2 直流増幅器の選び方

直流増幅器は、その用途によって、機種を選択する必要がある。

予算に制限がなければ、フローティング入力の高級器を採用すれば、ほとんどの計測に使用できる。ただしこのタイプは直流増幅器の中で最も高価である。

そこで新規に購入する場合は、用途に応じて最適のタイプを選択する方がよい。選択の目安となるものは仕様であるが、予備知識なしに良否の判断をつけにくい場合も多いのでとくにポイントとなる項目をとり上げて簡単に解説する。

(1) コモンについて

アナログ計測ではよくコモンという言葉が使われる。これは文字通り共通という意味で、あるいくつかの電圧値を論ずるとき、共通の基準点という意味で使われている。この基準点(コモン)というのがくせもので、何か所かの電圧源がある場合、各々のコモン間に電位差(電圧)のある場合が多く、全体をまとめて論ずる場合、どこか1カ所を全体のコモンとしてきめないと、電圧値を規定できない。また1カ所をコモンと定めても、それが点でなく電線等で長く引いている場合は気を付ける必要がある。

その電線が出力電流等の帰路になっていたりすると、電線上に電位勾配を生じ、基準点とはいえなくなるからである。また各々の電圧源をコモン接地した場合、接地点を1ヶ所にまとめる場合はよいが、接地点が異なったら駄目である。これは接地点間には必ず電位差があるからである。以上述べたように、ある計測システムを考えると、多くの各種機器が継続に、並列に接続されることが多いので、コモンについて充分配慮する

必要がある。通常システムでは、データを最終的にとりこむ機器の入力のコモンを全体のコモンと定める場合が多い。

我々はこれをシステムのコモンと呼んでいて、ここを接地することが多い。(最適な接地点である)

2点接地は前にも述べた通り、接地間電位差が、誤差の雑音として混入するので絶対避けなければならない。実際のシステムでは、信号源とシステムのコモンの間に大きな電位差がある場合が多くある。

これらの場合は、直流増幅器の適切な使用により、問題の発生を防ぐことができる。これは後でも述べる直流増幅器の持つ、同相電圧による、誤差や雑音の発生を抑圧する機能(CMRR)、同相電圧に対する耐圧の機能(CMV)である。

以上述べたように計測システムにおいて、データがデジタル化される直前まで、常にどこがシステムのコモンか、コモン間の電位差をどう処理するかを考える必要がある。

(2) 直流増幅器のケースの問題

通常カタログ仕様には記載されていないが重要な問題がある。これは直流増幅器ユニットの外周をかこっているケース(ほとんどの場合金属である)が、どこへ接続されているかである。

比較的簡易な直流増幅器の場合、ケースは静電シールドとして使用するために、コモンに接続されている。これは直流増幅器を机上にセットしたり、架台にとりつけたりすると増幅器のコモンはその地点で接地される簡単な用途の場合は、これでもよいが、前にも述べた通り結果的には信号源、システムのコモン等が接地されることが多いので、多点接地と

なり問題を生じやすい。
従って、直流増幅器のケースは回路からフリーになっているのが理想である。

当社の直流増幅器では、新 6L, 6B シリーズのすべてがケースフリーになっており、多点接地になる心配はない。

(3) 直流増幅器の入力回路

直流増幅器の入力回路には次に示すようなものがある。

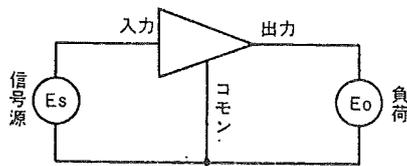


図 1 3

図 1 3 はシングル入力のもので、前にも述べたように 2 点接地になると、接地点間電位差は、負荷からみて入力信号と加算されて入力となり、誤差を生じたり、雑音として混入したりして問題となるので、直流増幅器の入力回路としてはほとんど用いられない。

レベルの大きな信号を取扱うローパスフィルタなどに用いられている。

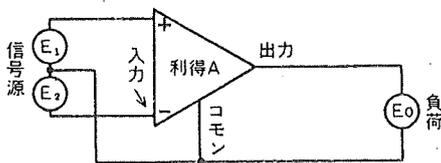


図 1 4

図 1 4 は直結差動入力形 直流増幅器によく用いられる回路である。原理的には、出力 E_o は $(E_1 - E_2) \times A$ (利得) で得られる回路で、2 点接地になっても、信号源のコモンが増幅器のコモンと異なる電位になって

も、下図のようになり出力に現われない。

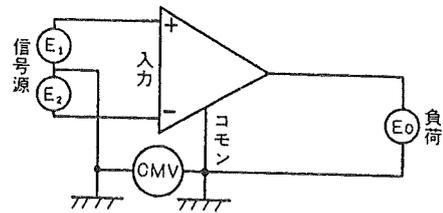


図 1 5

CMV : 2 点接地による電位差または信号源と増幅器のコモンの間に電位差がある時の電圧。

+ , - 入力に同相に加わるので同相電圧 (COMMON MODE VOLTAGE → CMV) と呼ぶ。

図 1 5 の場合

+ 入力 は $E_1 + CMV$

- 入力 は $E_2 + CMV$

差動入力回路であるから、出力は

$$E_o = [(E_1 + CMV) - (E_2 + CMV)] \times A$$

$$= [(E_1 - E_2) - (CMV - CMV)] \times A$$

$$= (E_1 - E_2) \times A$$

で CMV は打消され出力に現われない。ところが実際には完全に打ち消されず、いくらか出力にその影響が現われる。この影響される程度を示すのが、色々な言い方があるが、同相分弁別比 (CMRR) である。

$$\text{これは } CMRR = 20 \text{ Log } A_d / A_{CM} \text{ dB}$$

ここで A_d は利得、 A_{CM} は同相利得。

で規定される。

例えば $CMRR = 120 \text{ dB}$ の直流増幅器の場合 10 mV の信号を利得 1000 倍で測定しようとしたとき、 10 V の CMV による障害はどの程度かという、信号は 10 mV の 1000 倍、出力で 10 V になり、CMV によるものは、 $120 \text{ dB} = 20 \text{ Log } 1000 / A_{CM}$ より逆算して、 $A_{CM} = 1 / 1000$ となり、すなわち 10 V の $1 / 1000$ の 10 mV がそれであり、 10 V の信号に対し 10 mV の誤差あるいは雑音となることがわかる。

実際の計測回路では、CMVが存在する場合が多いので、CMRRは重要な仕様である。また当然CMVにも限界があるので仕様には必ず記載される。

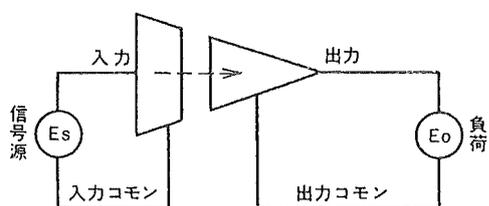


図 1 6

注：入力コモン、出力コモン間抵抗は ∞ でもよい、両者とも別々の基準点（コモン）として使用できる。ただし出力コモンが増幅器ケースに接続されているときは、ケースと負荷の2点接地に要注意。

図 1 6 はフローティング入力で入力がシングルのものである。

この方式のものは、入力、出力間が電氣的に絶縁されていて、信号分だけ通過する様に作られている。

従って、入力のコモンと出力のコモンは任意に接地してもよいし、電位差があってもよいし、要するに使いわけができるのできわめて使用しやすい。

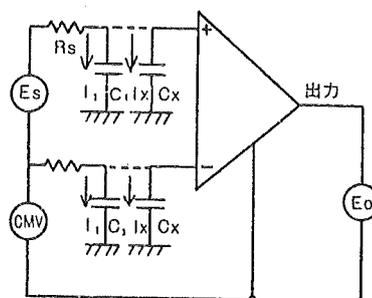
ただしこのタイプのものは、広帯域化が困難であったり、入出力間の絶縁に変復調方式を用いているものでは、直線性をあまりよくできないとか、変復調の周期性雑音を生ずるとかの問題もある。

もちろんこれらの問題の発生しない高級機も発売されている。このフローティング入力のものは、直結差動形よりも良いCMRR, CMVが得やすい。

CMVは、絶縁されている入力と出力間の耐圧になり、直結形のCMV

は回路の電位配分上きまるので一瞬の過大CMVでも飽和してしまうのに対し、フローティング入力では短時間で絶縁が破壊されない場合はCMVが仕様より大きく越えても測定が可能である。

実際の計測では、配線等から接地に対し容量結合によってリーク電流が流れ、配線抵抗による電圧降下のアンバランスが直流増幅器の入力に差動電圧として印加され、等価的に著しくCMRを低下させることがある。これらや直流増幅器自身のCMRRを良くするために、通常入力にはガードシールドが設けられている。これは、図 1 7, 1 8 で簡単に説明する。



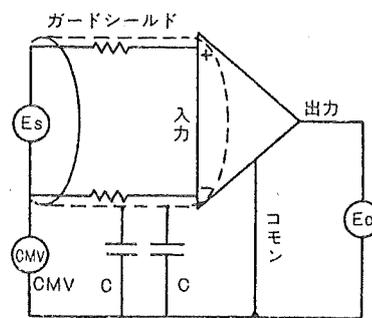
A. ガードシールドのない場合

図 1 7

ガードシールドがない場合は、対アースのストレイや線間の容量 $C_1 \dots C_x$, $C_1 \dots C_x$ にCMVが印加されることにより、 $I_1 \dots I_x$, $I_1 \dots I_x$ が流れ

$$\sum_{x=1}^X I_x \times R_s - \sum_{x=1}^X I_x \times R_s'$$

の電位差が増幅器入力端で生じ、同相入力から差動信号が生ずることになりCMRRは低下する。



B. ガードシールドのある場合

図 1 8

入力線および増幅器入力部をシールドで囲み、CMVの入力に接続すると入力線とガードシールドとは同電位にな

り、入力線からは電流が流れず差動信号は生じない。

電流はガードシールドからだけアースへ流れる。

注：フローティング入力の場合は、フローティングされている部分もガードシールドで囲むことになる。

9-4-3 仕様の読み方

前の項でふれなかった他の仕様の項目のうち重要と思われるものについて簡単に解説する。

(1) 雑音

これは入力信号と比較しやすいよう、出力におけるレベルではなく、入力換算値で示される場合が多い。

また利得を変えたときでも、出力における雑音レベルが計算できるように、入力換算値+出力換算値で表現しているものもある。

この場合は入力換算値に設定している利得を乗じ、出力換算値をそれに加えれば、出力における雑音レベルを計算できる。

また雑音を電圧性のものと、電流性のものに分けて規定する場合もある。

この場合は、電圧性雑音と電流性雑音に信号源抵抗値を乗じて加算したものが全体の雑音電圧となる。

また帯域を区切って、下記のように示す場合もある。

DC~100Hzで 5 μ V

DC~ 1kHzで 15 μ V

DC~10kHzで 30 μ V

この項で特に気を付けなければならぬのは、雑音の値がピーク値か実効値かということである。

雑音がホワイトノイズに近ければ、実効値はピーク値に対し $1/\sqrt{2}$ ~ $1/8$ ほどの値になり、はるかに小さな値になり、はるかに小さな値で示されることになる。測定しようとするデ

ータが振幅の場合はピーク値が、データ自体がパワーのようなものときは実効値がS/Nをまとめることになるが、実効値表示の仕様の場合極めて大きな振幅のパルス状雑音が含まれていても、仕様では小さな値で示されるので気を付ける必要がある。

また信号として識別できる信号のレベルは雑音のレベルまでということになる。

(2) ドリフト

これはゼロドリフトのことで安定度と表現される場合もある。

直流増幅器は直流をその信号として取扱うので、入力短絡すなわちゼロ入力ときは出力もゼロVで変化しないのが理想である。ところが実際には、入力がゼロを保っていても出力が変動することもある。

この変動する原因は主に周囲温度の変化で、長時間の場合は時間も原因となる。

これは誤差を生ずる要因になるので、ドリフトとして仕様の項目でそのレベルが明記される必要が生ずる。これも入力信号のレベルと比較しやすいように入力換算値で示される場合が多い。

また前項と同じ理由で、入力換算値+出力換算値で示される場合もある。値は主に温度係数で示されるが、時間もドリフトの原因なので、時間係数と両方で示される場合が多い。

この仕様は直流増幅器が電源を投入されてから、内部で熱平衡し、出力が安定してからの値で示される。

このためにこの安定時間も併記されることが多い。

(3) 利得

直流増幅器は汎用の計測器なので、色々のレベルの信号を取扱えるように利得の切換器が付いている。

この項で注目すべき点は、その最大利得はいくらか、利得の切換幅ほどの程度でどの程度の細さか、利得の正確さはどの程度か、利得の安定度はという大きくわけて4項目となる。最大利得は①、②項と共に取扱える信号の下限のレベルと関係があり、利得の切換幅、細さは取扱う色々のレベルの信号に対しての便利さ、応用範囲の広さのめやすになる直流増幅器の用い方では出力を読みとり使用した利得で割算して信号のレベルを直読する場合が多い。従って利得の正確さ利得精度は重要な項目になる。

また利得の正確さと共にその安定度も重要で、一般にその温度係数が仕様の項目にのせられる場合が多い。この場合その時間係数も当然存在するが、値がきわめて小さく、また仕様として管理するのが大変なので一般には項目としてのらない場合が多い。

(4) 直線性

入力電圧が直線的に増加するとき、その出力も入力に比例し完全に直線的に増加すれば、直線性についてはまったく問題がなくなるが実際にはそうならない。

この理想直線からどの程度ずれるか示すのがこの仕様である。一般的にはフルスケールのX%以内と表現される場合が多い。この意味はフルスケールが10Vで直線性を0.01%というと、読み取り値には10Vの±0.01%、すなわち±1mVの直線性誤差が含まれる可能性があるということである。

(5) 周波数特性

これは直流の利得に対しDC～100kHz -3dBというようにある誤差を生ずる周波数で示されることが多い。

場合によっては下記の例のように帯域によって細く規定することもある。

DC～ 1kHz ±0.1%

DC～ 10kHz ±2%

DC～100kHz -3dB

このように細かく規定することは望ましい方法であるが、このように細かく精度良い仕様で製品を管理して出品するためには、非常に多くの工数を要し、高価になるのでよほどの高級機でないとは実現できない。

また国産品ではほとんどないが周波数特性とスリューリミットまたはスリューレートという仕様が並記されている場合がある。

この併記されているのは、増幅器の出力の最大変化速度を示すもので、このような仕様で書かれているものでは、フルスケール電圧ではその示されている周波数まで信号が通過せず、ひずんだり、振幅が小さくなったりするときがある。これはフルスケールでは、出力の変化速度がそのスリューリミット以上になってしまうからで、振幅を小さくすると通過するようになる。

この点は特に輸入品の場合、気を付ける必要がある。

- (1) 本書の内容の全部または、一部を無断で転載することは固くお断りいたします。
(2) 本書の内容に関しては、将来予告なしに変更する事があります。

シグナルコンディショナー	1995年 2月第3版
6 L 0 1 取扱説明書	1995年 7月第4版
5691-1458	1996年 6月第5版
1986年 10月初版発行	
発行 NEC三栄株式会社	

NEC NEC三栄株式会社

本社：東京都小平市天神町
技術センター：東京都小平市大沼町

